

兒童研究法講義 (八)

第四高等學校教授 松 本 金 壽

幼兒の記憶

記憶といふ働きは、人間の精神生活にまつて極めて大切な一面であることは云ふまでもありません。私共の日常生活の中から、その部分を取り出してみても、過去の経験の影響——つまり記憶のお蔭によらないものは恐らくないこと云つてよいでせう。日々に新にさいふこことが云はれますが、それは全くの白紙の上になんか新しい色づけが加つてゆくさいふやうな性質のものではなく、長いなり短いなりに、夫々の人々が續けてきた過去の経験さいふ土臺の上に築き上げられてゆく上層建築に過ぎないわけです。私共の日常生活から記憶さいふものを取り去つて了つたならば、生活は

おろか、生命の維持さへ覺つかないこと云へませう。

そんなわけで、記憶さいふ働きについては昔から色々の説明が行はれてきました。記憶の良否は人間の能力を定める標準であるやうにも云はれましたし、又人間と動物とを區別する境目であることも論じた人があります。今でも記憶がよいこと云ふことは頭がよいこと同じ意味に使はれることが少くありませんし、忘れっぽいこと云ふことは駄目な人間だといふやうな意味ばかりでなく、一種の不徳義でさへあるやうな響きを與へがちです。このやうに記憶さいふ問題は、人間の精神生活を考へる上に非常に大切な意味が認められてゐますが、それでは記憶さいふ一體どんな性質の働きを指すのでせうか。

砂糖を見れば誰でも甘いと思ひ、火を見れば皆熱いと思

ふやうに、私共の日常生活は殆ど凡て過去の経験の影響の上に成り立つてゐる。こいふことは、前述した通りですが、記憶に云ふ意味を、こんなに廣く解釋するに、私共の精神生活は凡てみな記憶でないものはありません。そればかりでなく、動物や植物にも、そして石や水なにも記憶がある。云はなければならなりません。心理學が發達しない昔には、こんな考へも行はれてゐましたが、精神作用について細い研究が進んだ今日では、記憶を過去の経験の影響と同じやうに考へる大まかな考へ方は許されなくなりました。

御承知のやうに私共の精神生活は、記憶の外に知覺か學習か思考か感情か意志か、色々に別けられてゐますが、是等のもの並べられてゐる記憶の働きは、普通次のやうに定義されてゐます。即ち、或る一定の印象をしつかりに覺え(記録)、それを一定の間忘れないで居つて(把持)、あとで想ひ出す働き(再生・再認)、つまり記録把持・再生・再認といふやうな四つの働きの時間的な連續を指すものだといふのが一番正しい見方です。それですから、記憶といふ働きには、見たり聞いたり、話したり考へたりこいふやうな色々な働きも含まれてゐるわけですが、たゞ違ふところは、是等の經驗が一定時間後にもハッキリと想ひ出されるに云ふ點にあるわけです。言葉を換へて云

ひます。着物を着たり、食事をしたり、話をしたりするやうな日常生活そのものを指すのではなく、或る特定の印象なり問題なりについて、「これはどこで見たものだ」とか、「あれはいつか教つたことだ」とか、特に過去に結びつけられた経験を指すものだとも云ふことが出来ます。もつ言葉を換へて云ひますならば、學習といふことの裏の事實だとも云ひませう。私共の日常生活の土臺をなす衣食住の問題などは、絶えず反復されるものですから、特別の努力なしに誰でも覺えられますが、學問上の智識か職業上の技能かかは、一生懸命勉強しないに吞み込めるものではありません。家庭・學校・社會といふやうな色々な方面における學習といふことが起るわけですが、斯うした學習は次々に積み上げられて一つの完成したものになるのが普通です。それ故、學習の進歩には記憶の裏づけがさうして必要なわけです。記憶といふ働きを昔のやうに廣く解釋しないにしても、人生における重要さは依然として同じです。殊に經驗的には極めて稚い幼児の教育にまつて、記憶を明確にしたり、増進したりする技術は頗る大切な問題の一つに云へませう。

二

昔から、そして今でも色々な意味に使はれてゐる記憶といふ働きについては、極く大體の説明を致しましたが、そ

れでは幼児において、これがどんな姿をなし、どんな形で發達するものでせうか。初めに先づ大體の傾向を述べてから研究法に移りませう。

未だ物のあやめも見分けがつかぬ嬰兒には記憶なきといふ働きが起る筈はありませんが、それでも人見知りを感じえる頃には記憶の芽生えが認められる云つてよいでせう。

見慣れてゐるものと新しいものととの區別や、自分の家とその家の區別等も、その現はれの一例と見ることが出来るでせうが、本當の意味での記憶の發達は言葉の發達に伴ふものだし云ふことが出来ます。私共の経験といふものは、直接眼の前のものでない限り、輪廓や要點として残るのが普通ですが、事物の要點を象徴した言葉といふものは、丁度それにふさはしい道具なのです。私共が過去の経験を追想してみた場合に、大抵の人は五歳頃とか六歳頃とかの印象深かつたこと、精々のところ三歳か四歳頃までのことしか辿ることが出来ないのも、言葉の發達と記憶の成立との間に深い關係があることを暗示してゐます。それ故、人間の記憶は、言葉の發達する幼児時代を出發點とするものだし云つて差支ないと思ひます。

それならば、どんな經驗内容が記憶され易いか云ふことが、次の問題になるでせう。それについては感情價と具體性との關係が擧げられてゐます。つまり感情的に強い印象とい

ふものは、それが愉快なものであつても不愉快なものであつても、強く把持されるものだし云ふことが第一の特色として説かれてゐます。このやうな傾向は何も幼児に限つたことではありませんが、特に幼児にはこの傾向が強いのです。これは幼児の生活が情意に充たされてゐることに大きな原因を持つものですが、此の傾向を逆用したものが體罰でせう。第二の特色として擧げられてゐる具體性、つまり具體的のものしか記憶され難いといふ傾向についても、説明を要しないと思ひますが、これは幼児における知性の未發達に因るものです。幼児に興味を持たせるといふことが、具體的直觀的に話すことを意味してゐるやうに、幼児自身の生活に即した導き方が保育の要諦とされる所以もここに關係してゐると思はれます。又記憶の仕方が分析的でなく全體的だといふ點も同じ原因に基いてゐる次第です。幼児が覚えてゐる歌や話の内容が、初めから終りまで一続きのものであることは、誰しも御存じのことと思はれます。

幼児の記憶内容と關聯して、兒童特有とも云ふべき直觀像現象について一言して置きます。直觀像といふのは、一旦見たものが取り去られても、そこにあり／＼と見える現象を指すのですが、斯ういふ經驗は殆ど凡ての幼児に認められる一般的な傾向だとされてゐます。色も形も大きな

も、さながら元のものに對すると同じやうに、生き／＼に蘇つてくる云はれる直觀像現象は、見たもの(視覺像)に想ひ浮べたもの(記憶像)がハッキリ區別される私共大人にまつては、むしろ奇妙な經驗のやうに思はれますが、

これも知覺か記憶さか精神作用が細く分化しない幼児特有の心の現はれ云ふことが出來ます。幼児が同じ物語を何遍でも／＼繰り返して讀んだり聴いたりしても倦きないのは、私共のやうに物語の筋を追ふだけではなく、物語の内容を現實的にあり／＼に想ひ浮べるさいふやうなころにあるやうにも思はれ、直觀像現象さいふものは、幼児教育上の新しい問題ではないかと思はれますので、一言附け加へて置きます。

三

前置きが少し長くなりましたが、最後に幼児の記憶研究方法を述べることに致します。

試験さか考査等も一種の記憶検査に相違ないのですが、試験や考査です、覺えた時想ひ出させた時との間に色々な條件が入つてきて、ハッキリした結果を見出すことが困難になりますので、やはり特別な材料(刺戟)を作つて實驗してみる必要があります。前にも申しましたやうに、記憶さいふのは記銘・把持・再生・再認さいふやうな複雑な精神作用ですから、一口に記憶がよいさか悪いさか云つて

も、漠然とした調査では、記銘が悪い爲か、把持に缺陷があるのか、再生に不備があるのか、原因を確めることも難しい次第ですが、精確な實驗によります、そこにはハッキリした原因を突きさめることが出來ます。

記憶の實驗法を先づ調べる材料つまり刺戟の方から云ひます、直觀的なものさ言語的なものに分けることが出來ます。直觀的な刺戟としては、色々な圖形さか繪畫さか寫眞さかが擧げられるでせうし、言語的な刺戟としては數字さか文字さか詩や文章等が擧げられます。是等の刺戟材料を作る時には、個人々々の經驗の影響の度合にムラがないことが大切ですから、餘り有りふれた出來合のものでなく、新しい工夫さ組合せ方が考へられなければなりません。若しも、或る特定の子供だけは何遍も習つたことがある刺戟材料です、他の子供達には不公平になるわけですから。

斯うした刺戟材料を一定の時間見せたり(直觀的な刺戟の場合)、又は讀んで聽かせたり(言語的な刺戟の場合)して、それをすつかり覺えるまでの時間を計つたり、覺えるまでに反復した回数を比べてたりする方法が一番多く用ひられますが、たゞ一遍だけ讀んで聽かせり、極く短時間見せたゞけで、さの位覺えたかを調べる方法も一工夫でせう。又直觀的な刺戟の場合には、後でその刺戟内容について色

色のこゝを云はせたり、見た通りのものを描かせたり、新しい材料の中から前に見せたものを指摘させる方法が伴ひます。

刺戟材料の組合せ方も簡複色々に變化出來ますし、刺戟を提示する時間も、幼児の精神發達の程度に應じて、長短色々に加減しなければならぬこゝは云ふまでもありません。又直觀的な刺戟材料の際に述べたやうに、一定の時間見せてから、三十分後さか二時間後さか一日後さか十日後さか、段々時間の經つにつれて、一旦記憶したものがみんなに變つてゆくかを調べるこゝも興味ある一方面でせう。

こんな風にして、どんな刺戟材料が覺えられ易いかさか、さの位の分量が覺えられ易いか、同じ刺戟材料のどんな所が覺えられ易いか等を調べられますし、又個々の子供の記憶力の違ひもハッキリ比較が出來ます。

一般的に云ふさ、同じ刺戟材料でも初めさ終りさは誰でも覺え易いものですし、一遍に何度も繰り返すより、二度さか三度さかに分けた方がしつかり覺えこまれるものですし、一纏りのものならば、餘り細く分けて切々にしてやるよりも或る程度全體のまゝ、教へた方が能率的ださいふやうなこゝが豫想される結果さ云へます。いづれにせよ、斯うした記憶傾向に即した教へ方が最も效果的なわけですから、色々の點で御研究を切望致します。

たゞ最後に附け加へて置き度いこゝは、記憶力さ智能との關係です。昔から頭のよいものは記憶力もよいさ考へられてゐますが、私共の研究によつても、これは確かに間違ひのない事實さして證明されてゐます。が然し、これには一つの除外例があります。つまり機械的なこゝの暗記は必ずしも智能に關係しないさいふ一事です。現に精神薄弱兒の中にも、カレンダー博士さ云はれるやうな超人的な日附の暗記の大家が居ります。

誤つた手がかりが話の筋をもつれさせて解決を延ばしてしまふこゝは探偵小説の讀者のよく知る處です。直觀の命する推理法が誤つてゐて運動の間違つた觀念に導き、この觀念が何世紀の間も行はれたのです。このやうな直觀が長く信じられてゐた主な理由は恐らくアリストテレスの思想が全歐洲に有力であつたからでせう。二千年間彼の著書と考へられて來た「力學」書の中に次のやうに書かれてゐます。

運動體は之を押す力がその働きを失つた時に靜止する。

ガリレイが科學的論理を發見して之を用ひたと言ふこゝは思想上の最も重要な大業の一つであつて、これが眞の意味に於ける物理學の第一歩となつてゐます。ガリレイの發見は、直接の觀察に基づく直觀的結論は誤つた手がかりに導くことがあるから必ずしも信用が置けるものではないことを私たちに教へたのです。

——物理學はいかに創られたか(アインシュタイン原著)より——